

ダイバーシティ事業 国際人事交流プログラム（派遣）
研究交流報告書

報告日：2020年3月1日

派遣者所属名	大学院経済学研究科
派遣者氏名	橋野知子
<p>今回の受入教員であったPierre Vernus先生とは、私が2016年に編集・刊行した本に寄稿をお願いして以来、研究上のメール等で意見交換を進めてきた。Vernus先生は、19-20世紀のリヨン絹織物産業史研究の第一人者であり、ともに国際的比較研究に関心を寄せているという点からも、私はさらに議論を深めたいと常々考えていた。特に、今回の滞在で深められた研究交流は、以下の二つに集約される。</p> <p>第1は、2021年7月25-30日にパリで行われる国際経済史学会（World Economic History Congress: WEHC）における我々のセッションに関する点である。我々がセッション・オーガナイザーとしてすでにファースト・コールでアクセプトされているSilk: trades, production and skills in a Eurasian perspective from the Seventieth to the mid Twentieth centuryについて、各報告者の役割やセッションの成果を書籍として刊行する計画等の議論を深めることができた。絹業は綿業と比較して、まさにシルクロードの時代からの長い歴史を有しながらも、奢侈品を生産する産業と捉えられがちで、国際比較や近代の経済発展・工業化に果たした役割については、これまで十分な議論がなされてきたとは言いがたい。そこで国際比較の視点にもとづき、グローバル経済史に位置づけることを、本セッションの目的として再確認できた。なおプレ・コンファレンスとして、本年5月15日に、セッション参加者がリヨン第二大学に集まり、研究会を開催することとなり、私も招聘をうけた。</p> <p>第2は、私が現在進めている'From Lyon to Kyoto: The modernization of traditional silk weaving district in Kyoto, 1887-1929'（近代西陣における絹織物産業発展史）の報告をVernus先生が所属する研究ユニットであるLAHHRAで報告した際、先生方、大学院生よりさまざまな視点から質問やコメントを受けた点である。本研究は、近代西陣の発展を日本経済史の中の織物業にとどまらず、先進地リヨンから日本への技術導入・普及がいかに進められたか、つまり国際的な技術移転を明らかにすることが一つの目的である。この技術移転の実態を日本に残された記録や資料のみから観察するのではなく、リヨンにおける資料からも考える必要性を痛感するよい機会となった。京都府の命で西陣からリヨンに機械の購入・修行に訪れた3名の詳しい資料ならびに実際に研修を受けた機業やかかわった人物の詳細について、日本側の資料の内容をVernus先生に提供し助言を受けながら、今後、大学やChambre de Commerceのアーカイブを利用して史料を収集し、上記の研究にも反映させる予定である。（追記：5月15日に予定されていたリヨンでの研究会は、COVID-19の影響のため来年1月に延期された）</p>	

海外派遣終了後の研究交流の進捗状況（2020年4月現在）

滞在期間中に、国際経済史学会のセッションのためのプレ・コンファレンスの日程も決まり、リヨン第二大学より航空券・宿泊費付きの招聘を受けた。そのための議論を帰国後もメールで進めていたが、コロナウイルスの影響で現在はゆっくりのペースである。状況が落ち着き次第、議論を再開できるようこちら側の研究については継続している。なお、上記のコンファレンスは、2021年の1月15日に延期して開催す旨、リヨン第二大学の同僚より連絡があった。さらに、本研究以外にも「19-20世紀の諸経済におけるエリートの役割（仮題）」についても、国際共同研究を進めるために、フランス側に研究費の申請をしている。